第Ⅰ編　縄文時代集落の成立と展開

―国分谷周辺区域における前期・中期を中心として―

清　藤　一　順

はじめに

明治10年(1877)、エドワード・S・モース博士により大森貝塚が発掘調査され、日本の縄文時代研究の端緒がきっておとされた。これから16年後、明治26年（1893）八木奘三郎博士により、本県の市川市姥山貝塚の発掘調査が行なわれたのであった。以来今日まで、県内の遺跡の発掘調査とその成果は、日本の縄文時代研究にとって非常に大きな役割を果して来たと言っても過言ではないだろう。それはかっての研究者にとっては東京に近い場所に良好なフィールドとして存在していたという地理的要因と、現在では、首都圏におけるベッドタウン、工業団地などの開発事業による遺跡全面の調査などに伴ない多量の、しかも総合的な資料を提供してきた事とともに、本県が、全国の貝塚の$\frac{1}{4}$以上を含む地域であるからであろう。

言うまでもなく、貝塚は、縄文時代研究に質・量とも豊富な資料を提供してくれる遺跡であり、県内の貝塚の発掘調査も積極的に行なわれてきた。

特に、土器型式による編年研究にとって、肉眼で明瞭に分層できる貝塚は非常に有効であり、その結果、現在のような整備された型式編年が確立されて来たのである。

しかし、こういった編年研究は、一方で、戦中の社会状況と相まって、目的化される事により縄文時代研究とは編年研究であるの如き風潮が固定化され、最近まで及んでいた。土器研究を否定する訳でも無く、むしろ、前に整備されたとは述べたものの、未だ多くの問題点を含んでいると考えるが、縄文時代研究を歴史学として１つの大きな流れの一部に位置づけるには、縄文時代を支えて来た人間達の集落の構造と展開、月並みな言葉で言えば、「社会関係」「生産関係」の解明という方向に目を向ける必要を感じざるを得ない。

又、最近では、大規模な開発事業に伴ない、縄文時代集落の全容が明らかにされて来ており、今後もその可能性が充分考え得る事であるが、この事を単に景観的に明らかにするに止めるのならいざしらず、その集落の実体、内外的な諸関係を明らかにする為にも前述したような視点での、縄文時代の理解が必要とされてくるであろう。

本稿では、県内西端部に位置する国分谷周辺、行政区画としては松戸市、市川市の遺跡を中心に縄文時代の、特に前期から後期前半に至るまでの集落が、どの様な構成から成り、諸関係の下でどのように展開していったかを探るという問題意識の中で、幾つかの事項について述べて行きたい。

Ⅰ　「集落」研究の歴史と問題点

通常、我々が「集落論」と一口で呼んでいる論文にも、それぞれ多くの異った視点から述べられている。まず、それらの幾つかを述べておきたい。

まず、生産関係と社会関係について、資料の未だ充分では無かった昭和10年（1935）に、今日の我々が見習うべき視点での論文が禰津正志によって提出されている（禰津1935）

禰津氏は、まず、「考古学が似って研究対象とする資料は、何れも孤立した個々の人間によってでは無くして、何らかの組み立てを持った人間社会によって生産され交換され、使用された…」という前提に、「遺物遺跡は不完全ながらも、必ずやその時代の生産諸関係及び社会組織を示すに相違ない。頼る可き文献としては何も無い原始時代の全社会的機構を発掘、拾集という限られた方法によってのみ得られる遺物、遺跡の研究にもとづいて再現すること、これが正に考古学の中枢的任務でなければならない。」と述べ、用語としては現在とは異っていても、その内容では、約40年後の我々にも通用する提言を行なっている。

禰津氏は、縄文時代の生産様式を、貝塚から出土する貝殻、鳥獣骨、角などから狩猟採集、漁撈であると述べ石錘の直径を計測し綱の大きさを推定し、又、やはり貝塚から出土する魚骨の中に遠洋及び、深海にしか棲息しないものがある事から、航海の為に大きな船が建造された事から協業の存在を述べている。そして、狩猟が不安定な生産様式である事から何らかの「低度栽培」を想定している。

更に、江見水蔭氏が貝塚を「むきみ屋」の跡と述べた事と、石鏃の製品、未製品を約 5,000点出土した静岡県美保貝塚、石錘約 300点を出土した川地貝塚、 2,000点以上の打製石斧を出土した東京都深大寺など、そして、他地域でしか産出しない石材を使用した石器が出土する事を根拠に、「氏族或は部落の共有物」である余剰生産物の交換と、「原始的な分業の出現」を述べている。

縄文時代の社会については、竪穴住居址、敷石住居址などの規模に大差の無い事、又、出土する遺物が土偶、石棒、土器、土錘、石錘など日常生活品であり、「奢侈高貴品」は見ないとし、又、墓地については共同墓地であり、特殊な施設を設けない事、副葬品が在っても素朴で質素である事から、階級の未分化の「無私財的社会」であると述べている。

資料が少なかった時期でもあり、かなり強引な考古学的事実のあてはめも見られるが、一方資料の豊富な今日、土器・石器・住居址・土坑などの諸遺物、遺構の型式分類に明けくれている我々にとって、その研究の方向は、改めて考える必要があるだろう。

次に和島誠一氏について述べてみる。和島氏は、「原始聚落の構成」（和島1948）に於いて、縄文時代の早期から後期までの各時期の特徴的な遺跡の例を掲げる中から、縄文時代が質的には、茨城県花輪台貝塚の出土遺物の中に、石皿と磨石、猪の牙製耳飾、貝製の装飾品、土偶などが認められ、後続する時期の文化要素を備えて居り変化していない事、前期では水子大応寺前貝塚

に見られるように早期と比べ大規模化している事、中期では姥山貝塚が数型式の土器を出土し、又貝塚の規模の大形化から定住の長期化を述べ、集落の中心部に貝の廃棄されていない部分が認められる事から長期的な集落の規制が在った事などを述べている。又、集落の大形化を労働力の増加による「単純協業と性別及び年令別等による初現的な分業の発達」そして人口増加による濫獲の防止を統制するための強固な規制が行なわれた統一体であり、「生産の面」では「聚落全体の組織的な動きに強く規制される…」と把えている。

更に、先述した禰津氏の引用と、土偶が女性を表わしている事から、縄文時代が母系的氏族共同体的関係の集落を形成していた事を述べている。

和島氏は、禰津論文で述べられた縄文時代における基本的関係を基礎に、各時期の代表的遺跡で検証し、特に、集落における社会関係について述べた。

この和島氏の縄文時代の特に中期を中心とした集落の考察から、更に具体的に、1遺跡の各住居毎の機能と流れを分析したのが水野正好氏であろう。

水野氏は、長野県茅野市与助屋根遺跡を分析し、石囲炉に使用した石が抜かれている住居と遺存している住居、住居址の重複関係、住居址の時期的分類、土偶・石柱・石棒による祭式の相異から、集落が一般的に、2棟を1単位とする小群が3集まり1大群となり、大群が2群集り1集落を形成している事、更に、各小群の祭式の相異を住居址構成員の違いと考えている。（水野 1964）

この後、秋田県大湯の野中堂と万座の環状列石を組石墓と規定し、更に、万座環状列石に隣接する区域に存在すると思われる住居址群との関係を、環状列石が周囲の2大群よりなる12戸の住居址に規定され、12分割できるとしている。又、松戸市貝の花、静岡県沼津市出口遺跡の調査結果も同様の方法で分類している。（水野 1968）

そして、これらの考察の1集約点として、「縄文時代集落復原への基礎的操作」（1669）を提出し、集落を構成する住居の間取り、改築などを述べているが注目すべき点は、「原初的な農耕」を想定し、縄文時代中後期の集落が、2棟を1家族とする「地縁集団」により形成されていたと述べている事である。又、集落の領域について環状集落の内側の「広場」を「供儀饗宴の場」か「特殊な地区にあった者の墓域」と述べ、その発生を黒浜期におき、後背地に家族の用益地としての畑、或いは周囲の河川、林などを村の用益地と考えている。更に、集落の移動、「本村と分村」そして「村のテリトリー」と集落の展開にまで言及している。

この約1年後、水野氏はそれまで述べてきた「集落論」の意義について述べている。（水野 1970）当時は、事前発掘の規模、量ともに登りつめた時期でもあり、各地で、遺跡に対する認識、学問的目的意識が備わないままに大規模な発掘が頻繁に行われ、各地において、多くの問題が提起された時期でもあった。この様な状況の中で、明確な目的意識を持たないままに行われる調査と、その結果として当然の帰結である不充分な報告書に対し危惧を感じ、その中に集落論の検討を位置付けている。

集落という用語が、かなり曖昧に使用されていた風潮に対し、後藤和民氏はその概念規定を行ない、各時期における「生活地点」と「居住形態」を述べている。(後藤 1970)

後藤氏は、遺跡を「生活地点一般」と把え、集落を「社会生活の本拠地」「狩猟、漁撈、露営、埋葬、祭祀、交易…など人間集団のあらゆる文化活動の求心的原点である。」と述べ、「ある結合紐帯によって集合した人間の単位集団が、一定の土地に定住し、一定の社会規制のもとに共同生活を営む、その本拠地である。」と規定した。又、共同体を表わす基本的要素として「1、大地(立地、自然環境、生産手段) 2、人間集団の結合紐帯(血縁関係) 3、生産形態と共同組織(所有と分配)をあげ、集落と共同体の関係を「集落は共同体の本拠地であり、共同体は集落の主体である。」と整理した。

又、後藤氏は県内の貝塚を中心に「貝塚文化」について述べている。(後藤1973) それによると、馬蹄形貝塚は中期、後期に認められ、中期は、「縄文集落全体がようやく定着的になる時期」後期は「縄文集落がもっとも大規模になり、もっとも集中的になる」時期としている。この定着性と集中性の根拠として、中、後期における貯蔵施設と貯蔵用土器の盛行を掲げている。又、大形貝塚の消滅と期を一にして、所謂「製塩土器」が出現する現象を把え、それらの分布地域の共通性から「有機的な関連性」を予測している。更に、貝塚に点在貝塚と、馬蹄形貝塚の存在する事実を、前者は食糧として消費された殻の廃棄されたもの、後者は「保存食糧として干貝を加工した場所である」とし、塩による保存を知らなかった人間達の創意とし、この干貝の生産により、縄文時代集落が定着化する大きな要因としている。そして、この干貝が、石器などとの交換物としても生産され、この生産を船橋市高根木戸貝塚から黒曜石の原石、石鏃、剝片などが多量に出土した事、土器胎土中の混和材に遺跡周辺では産出しないものが含まれており、土器製作の困難性から特定地域での製作が考えられる事、多量の土偶を出土する茨城県椎塚貝塚の例(高島 1916) ヤスなどの骨角器を多量に出土した茨城県立木貝塚の例(戸沢他 1967) などを考慮し、当時の集落間が「強力な共同的規制」により分業的生産を行なっていたとしている。

「原始共同態」を「土地の占取体、生活手段の所有体、消極的生産と消費を同じくする(原則的に)自給自足経営体、生活機能体」とし、『原始共同体』は、構成単位の各『原始共同態』の生活を相互的に保証する社会経済的な連帯集団(単位集団の集合体)であり、それに連なるのは全くの彼らの自由意志ではあるが、必要とか伝統(踏襲可能性を持つ)とかの要素が動いて何らかの外部集団と結びつく」(堀越1971)と基本的、原理的認識を前提に、千葉県内の貝塚を中心とする集落を語っている研究者に堀越正行氏を掲げる事ができる。堀越氏は、1住居の居住単位は不明瞭としながら、集落が構成員自身によって統制されており、又、馬蹄形集落が約2㎞前後の距離で存在する事から、行動領域約2㎞前後とし、その内部に含まれる小貝塚及び、貝塚を伴わない遺跡は馬蹄形集落に、何らかの形で付随する遺跡と述べている。そして、特に海に対する生産活動が特定の集落によって占有されておらず、「隣接諸集団ともども一定の取り

決め」により居住の安定化が計られているとしている。（堀越1972）

最後に、これまでの「集落論」とは視点がやや異なるが、小林達雄氏の論文を紹介しておきたい。（小林1973）

小林氏は、遺跡の「かたち」を「セトルメント」と定義し、各遺跡の立地、面積、遺物、遺構などの共通点を摘出し、6つのパターンに分類している。そして、「一定の地域内におけるセトルメント・パターンの組み合せ形態」が「セトルメント・システム」として、「集団の行動様式から社会構造までをも反映する」と述べ、具体的資料として多摩ニュータウン内の遺跡を例にあげ述べている。しかし、こういった問題意識は理解し得ても、そのパターン化の中に氏の意志はまったく反映されておらず、この事は、各「パターン」の出現する比率を時期毎に述べているに過ぎず、又、遺跡の表面的事実がわけられるだけで、そのようにさせた人間の行動は何ら明らかにされ得ていない。

以上、「集落」をテーマとした論文を紹介してきたが、次に幾つかの問題点に触れてみる。

まず、水野氏は、与助尾根遺跡遺物の分析を基礎として、「2棟3小群」という集落構成の型を述べた訳であるが、その基礎とした事実認識が誤りである事は、詳細に明らかにされている（堀越、長崎1971）のでここでは改めて述べない。一言付け加えるならば、適切な批判への反批判をせずに、何故「2棟3小群」に固執するのか、然るべき根拠でも持って居られるのか問うておきたい。それは、氏が鋭い情況認識と、問題意識を持って居られると考えるからであり、それらの相互批判の中から、「集落論」がより発展して行く可能性を有していると思うからである。水野氏の提出した視点は、どちらかというと土器からしか見られない、特に縄文時代に学ぶ者にとって、漸新なものとして映ったし、又、「縄文時代集落復原への基礎的操作」（水野1969）の中で述べた各項目の一つ一つは、我々が発掘調査する際、又、住居址群を分析し、集落へと上昇させる際に、必ず検討しなければならない点である。

又、「なぜ縄文時代集落論は必要なのか」（水野1970）は、無目的に発掘を行なって行く考古学そのものの姿勢への警鐘であり、縄文時代に関わる者のみならず、今日でも一読する必要のある論文であろう。

次に、後藤氏について触れてみたい。後藤氏が先に述べたように「集落」を規定した概念は、今日の段階で充分整理されたものと言えよう。（後藤1970）しかし、その他の点で幾つかの疑問を述べてみたい。それは、特に千葉県内における貝塚の検討に関してである。（後藤 1973）まず、縄文集落の定着に関してであるが、氏は、それを大形貝塚の発生する中期と規定し、又、大形貝塚の発生する後期に、集落が最も大規模化、即ち集中したと述べている。まず、「定着」をどの様に把えるかが問題であろう。「定着」を表わす指標として、まず考えられる事は、連続した複数の土器型式にわたって集落が営まれている事があげられるだろう。又、たとえ単一の土器型式しか使用されていないとしても、竪穴住居の整備、一般化、重複、拡張は「定着」を意識した結果であろう。更に一定地域に、生産領域を背景に規則的間隔をもって（単に距離

的にでは無く環境的に）集落が分布する事は、テリトリーの存在が推測され、この事からも、一定区域内での定着 — 集落の定着 — が予測されるのである。氏は、「埋め甕」、貯蔵穴（小竪穴？）などの「貯蔵施設」と、干し貝などの保存食料、保存用の土器などにより、定着化を展開しているが、埋め甕は食料の保存施設としては小さい事、又、氏の言う貯蔵穴が小竪穴を意味していると思うが、小竪穴は墓坑としても考えられる事、又、大型土器も棺として製作された可能性が強い事などから、全面的には承認できないものである。以上の点については後章で詳述する。

II　千葉県縄文時代集落の変遷と展開

本章では、縄文時代の各時期に於ける遺跡、集落の存在形態にどの様な変化が認められるか述べ、更に、その中に認められる幾つかの問題点について述べて行きたい。又、具体的資料としては、特に松戸市、市川市即ち、国分谷周辺の区域に所在する遺跡を中心に使用し、この区域を主として述べて行く事とする。

1）撚糸文系土器に先行する土器文化

千葉県内に、縄文時代早期の井草、夏島などの、所謂「撚糸文系土器」に先行する土器文化が存在する事は、極最近明らかにされた。これらが、縄文時代に属するか否かはここでは明らかにできないが、即ち、隆線文土器、瓜形文土器、無文土器などの一群である。

これらの土器に伴う有茎尖頭器の出土は、松戸市寒風（湯浅1968）、同子和清水（鳥巣1973、三輪1974）、千葉市新堀込遺跡（千葉市史編纂委員会1976）、同坂月町蕨立貝塚G地点（千葉市史編纂委員会1976）、同桜木町大作遺跡（江崎1966）などで確認されており、その存在は予測され得る事であった。

しかし、今日では、千葉ニュータウン内の一連の調査により、印旛郡印西町草深地国穴台遺跡では隆線文土器が（天野1974）、同浦幡新田榎峠遺跡では瓜形文土器が（鈴木1974）、印旛村瀬戸遠蓮遺跡では微隆起線文土器が（鈴木1974）が出土した事が確認されている。しかし、これらの土器片は全て微細であり、土器の全容を知る事はできないし、又、これらの土器を使用した人間達の痕跡は県内では確認されていない。

2）早期撚糸文系文化の集落

千葉県内で、井草式、夏島式、稲荷台式、花輪台式の、所謂「撚糸文系土器」を出土する遺跡は、筆者の知り得る限りでは59ヶ所（第1表）であり、明らかにこの時期の土器を伴う貝塚は、西ノ城貝塚の1ヶ所に過ぎない。

それでは、この時期の代表的な遺跡を紹介しておく。

第Ⅰ表　縄文時代早期（撚糸文系、沈線文系）遺跡地名表

所在地	遺跡名	出土土器	所在地	遺跡名	出土土器
千葉市小中台町	鳥　込	井草、夏島	佐倉市下勝田	No.322	夏島
〃　〃	河　原	井草、夏島、稲荷台	〃	上別所 No.240	夏島
〃　源　町	北前原	井草	〃	飯　重	夏島
〃　都　町	木戸場	夏島	佐原市	三郎作	花輪台、田戸
〃　小間子町	小間子町	井草、夏島	〃		花輪台、田戸
〃　生実町	峠の台	田戸上層	香取郡神崎町	西ノ城	井草、夏島、田戸
〃　大木戸町	南大野A	夏島	〃　〃	植　房	夏島
〃　〃	茨ヶ台	井草、夏島	〃　小見川町	城ノ台	夏島、花輪台
〃	大森第II	井草、夏島	成田市東三里塚	No. 3	井草、夏島
君津市	本名輪	夏島、田戸	〃	No.51	井草、夏島、田戸
〃	坂　田	山形押型、夏島	〃	古込朝日ヶ丘 No.13	井草、夏島、田戸
木更津市	桜井手児塚封址	井草、夏島、大浦山、田戸	〃	古　込 No. 55	井草、夏島、田戸
富津市	桜井駒場稚児墓	夏島	〃	No. 56	井草、夏島、田戸
市川市	根古谷	花輪台	〃	天　浪 No. 18	井草、夏島、田戸
〃	美濃輪台B	田戸下層	〃	No. 19	井草、夏島、田戸
松戸市栗ヶ沢	谷津口 II	稲荷台	山武郡芝山町	小　池	井草
〃	二ツ木向台	夏島、稲荷台、花輪台、田戸	夷隅郡老　川	村会所	夏島
〃	大　橋	井草	〃　富浦町	大屋崎	夏島
〃	勢至前	稲荷台	印旛郡印西町	竹袋平台先	井草、夏島
〃　上本郷	七畝割	井草、稲荷台	〃　〃	草深六角	夏島
〃	登　戸	井草	〃　〃	和島南西ヶ作	井草、夏島、田戸
〃	鳥井戸	花輪台、田戸	〃　〃	小泉高根北	押圧、井草、夏島、田戸
〃	幸　田	田戸	〃　〃	浦幡新田榎峠	瓜形(?)押圧、井草、夏島、田戸
〃	道六神	田戸	〃　〃	七軒家	井草、夏島、田戸
〃	南道谷	田戸	〃　〃	宗甫北	夏島
船橋市小室町	白井先 A	井草	〃　〃	小林石道	夏島
〃	白井先 D	井草	〃　〃	船穂吉田ヶ原	夏島
〃　前原町	佐倉道南	井草、夏島	〃　本埜村	竜復寺向原	夏島
〃	飯山満東	夏島、稲荷台	〃　〃	角田雨古瀬	押圧、井草、夏島、田戸
野田市	尾　崎	稲荷台	〃　〃	物木古屋敷	夏島
流山市	鰭ヶ崎	山形押形、田戸	〃　印旛村	瀬戸遠蓮	微隆起線、押圧
市原市	西　広	夏島	〃　〃	吉高家老地	田戸、茅山上層
〃	東間部多	夏島、三戸	東葛郡白井町	十余一一本桜	井草、夏島
〃	浅間神社	夏島			

香取郡神崎町西ノ城貝塚　（西村 1955）

西ノ城貝塚は、北に利根川を望む、標高30～35m、長軸約1.3km、短軸約0.5kmの独立丘陵上に立地している。昭和29年（1954）に調査が行われ、井草式、夏島式、稲荷台式、三戸式、田戸下層式、茅山式の土器片が出土している。又、井草式及び夏島式土器を含む径約25mの貝層が形成され、この貝層は淡水産のヤマトシジミを主体とし、他に鹹水産のハマグリ、チョウセンハマグリ、イタボキから成っている。ローム層上面に炉址が1ヶ所確認され、又、局部磨製石斧7点などが出土している。

茨城県相馬郡花輪台貝塚（吉田 1948）

先に紹介した西ノ城貝塚から利根川を約25㎞上った地点に位置する。

ほぼ南に突出した、標高約23mの台地上に位置し、3ヶ所の小貝塚が確認されていた。そのうち2ヶ所の貝層を調査した結果、花輪台式土器を伴う竪穴住居址5基、竪穴1基が確認されている。竪穴住居址それぞれの規模は明らかではないが、1辺の長さが約6.5m～3.8mの方形に近いプランと述べられており、ローム層の掘り込みは約20～30cmである。内部には、径15～35cm、深さ30～50cmのピットが16～31ヶ所、1辺約1m、深さ10cmの竪穴が2基の住居址で確認されている。2ヶ所の貝層は、いづれも花輪台式土器を伴い、ヤマトシジミを主体とし、ハマグリ、マガキを含む貝層である事が確認され、貝層中よりニッポンジカ、イノシシ、ウサギなどの哺乳類、キジ、シギなどの鳥類の骨角を出土している。石器は、片刃の局部磨製石斧1点、石鏃1点、スクレーパーなどが出土し、この他、針、釣針などの骨角器、土偶1点が出土している。

利根川をはさみ、時間的にはやや異なるがほぼ同系文化の、学史的な2遺跡について述べた。

以上述べた2遺跡の例から、茨城県の花輪台貝塚において竪穴住居址が検出され、集落が営なまれていた事が明らかであるが、調査区域が極めて一部であり、又、他に、このような集落と断定できるような遺構を検出した遺跡は少ない。この為、一般的にはどのような住居に住いしていたかも明らかにはできず、ましてや、どのような構成の集落を営み、どのような規模の生産活動を行なっていたのかは、極一部の事実からの推測をしか許さないのが現状である。本県では第2表のように、遺構としては炉址が2遺跡で確認されたに過ぎず、又、神奈川県夏島貝塚に於ける炉址の検出例などから、炉を中心とした、極めて小規模な集落が、営なまれているに過ぎず、従って生産力も低い事から中・後期と比べ著しく人口は少なく、この事が遺跡数の少なさ、分布の希薄さとして現象しているのであろう。千葉県に於いては撚糸文系文化の分布は、比較的利根川流域、或いは印旛沼、手賀沼周辺に多く認められるが、未だこの時期に関する検討が充分行なわれていない今日、今後、分布などに大きな変化が認められるようになる事は充分推測される事である。又、今回主なる対象とした国分谷周辺区域にはこの時期の遺跡は7ヶ所であるが、その多くは古利根川水系に位置している。（第3表、第1図）

3） 沈線文系文化の集落

この時期に於ける竪穴住居址の検出例は、貝塚が盛んに形成された前・中・後の各時期に比べると比較にならない程少ないが、特に利根川、或いは印旛沼周辺の幾つかの遺跡で竪穴住居址が確認されている。（第2表）

成田市古込No.14遺跡では、田戸下層式に属する竪穴住居址3基と、その他に炉穴2基、炉址1ヶ所が検出されている。（佐藤1971） プランはいづれも隅丸の不整方形であり、うち1基には炉址の存在が確認された。この他成田市内には、No.16遺跡、No.18遺跡などで竪穴住居址や竪

1
2
6
7
8
9
21
22
23
24
32
47
37
56
53
67
68
75
70
91
96
129
119
138
123
137
136
○ 撚糸文系土器を出土する遺跡
□ 沈線文系土器を出土する遺跡
△ 条痕文系土器を出土する遺跡

第１図　早期遺跡分布図

第2表　千葉県における縄文時代早期遺構

所在地	遺跡名	遺構	数量	時期
香取郡神崎町	西ノ城	炉址	1	井草又は夏島
成田市東三里塚	No.51	炉址	1	早期
成田市	古込 No.56	竪穴住居址	1	田戸下層
		炉穴(?)	1	〃
		炉址	1	〃
成田市	古込 No.14	竪穴住居址	3	茅山
		炉穴	2	〃
		土坑	1	〃
成田市	No.16	竪穴遺構	1	田戸上層
成田市	天浪 No.18	竪穴住居址	1	田戸上層
成田市	天浪 No.19	竪穴住居址	2	田戸上層
印旛郡印西町	榎峠	炉址	1	田戸下層
		土坑	1	〃
印旛郡印旛村	吉高家老地	竪穴住居址	1	田戸下層
		炉穴	5	茅山上層
千葉市	鳥込	竪穴住居址	23	鵜ヶ島台
		炉穴	約150	茅山
千葉市	向ノ台	竪穴住居址	1	茅山
市原市	大厩	炉穴	36	茅山上層
市原市	東間部多	竪穴住居址	1	鵜ヶ島台～茅山下層
		炉穴	約120	〃
船橋市	飛ノ台	炉穴		野島
船橋市	佐倉道南	竪穴住居址	4	子母口
		炉穴	4	〃
		土坑		〃
市川市	美濃輪台A地点	炉穴	5	茅山上層
	B地点	炉穴	6	〃
松戸市	幸田	炉址	1	茅山
		炉穴		
佐倉市	間野台	竪穴住居址	1	茅山
佐倉市	上座	竪穴住居址	2	茅山下層
		炉穴	7	〃
佐倉市	飯重新田	竪穴住居址	3	茅山
佐倉市	石神第1地点	炉穴	6	野島
		〃	7	鵜ヶ島台
		〃	1	茅山下層
		〃	1	茅山上層
		〃	8	不明

穴遺構、及び炉址などが検出されて居り、この時期の集落の内には、撚糸文系の文化では明らかではなかった幾つかの施設の使いわけが行なわれていた事が認められるようになる。（西野他1971）

次に、この時期の生産対象が明らかに認められる貝塚を見ると、香取郡小見川町城の台貝塚は、ほぼ南に突出した舌状台地に立地し大きく分けると、北と南の2地点の斜面貝層の分布が確認されている。（吉田1955）昭和18年と24年の2回の調査が行なわれ、昭和24年の調査では、子母口式を伴い、ハマグリ、アカニシ、ツメタガイなどの鹹水産の貝よりなる純貝層、田戸上層式土器を伴い、ハマグリを主体とする上部混土貝層、そして貝層を構成する貝は明らかではないが、田戸下層式土器を伴う下部混土貝層と、やはり田戸下層式土器を伴う貝層下土層の計4層に分層している。土器の他には、敲石2点、磨石1点、又、有孔の骨針1点などが出土している。この貝塚は、千葉県では最も古いと思われる鹹水産性貝塚である。

国分谷周辺の分布から見ても、この時期における遺跡は少なく、（第1図）千葉県に於ては、この沈線文系土器の頃より竪穴住居址の検出例が増加するが、一方、多摩ニュータウンNo.52遺跡（小林1966）などでは、井草式土器を出土する竪穴住居址が既に知られて居り、この時期以前からの存在も予測可能であり、竪穴住居の発生の問題など、今後の課題であろう。

4） 条痕文系文化の集落

この時期は、これまでの時期と比べ、遺跡の分布、数、立地、竪穴住居や炉などの遺構の数の飛躍的増加、土器底部の平底化などの多くの点での相異が認められる。国分谷周辺においても、沈線文系土器を出土する遺跡が、6ヶ所であったのに対し、この時期では23ヶ所に増加している。（第1図、第3表）

又、この区域では、この時期の集落に対する系統的な調査は行なわれていないが、幸田貝塚（八幡、関根他1971）では茅山上層期の炉址などが検出され、又、美濃輪台遺跡では、A地点（戸沢、堀越1974）とB地点（堀越、田川1975）の2ヶ所の調査が行なわれた結果、茅山上層期の炉穴がA地点で5基、B地点で6基の計11基が検出されている。又、A地点では貝層の調査も行なわれたが、その貝層を構成する貝はハイガイがもっとも多く、他にマガキなどが主であり、ハイガイが顕著に見られる事は従来から知られている通り、気候の温暖化、海進の進行を意味している。

千葉市向ノ台貝塚は、昭和21年に調査され、1基の竪穴住居址と計4体の屈葬人骨が確認されている。（武田1953） この検出した住居は不整梯形を呈し、人骨2体は住居址に埋葬されていた。

この条痕文系、茅山期には炉穴が広範に、しかも多数検出されている例は最近特に多い。千葉市鳥込東遺跡（千葉市史編纂委員会1976）では約150基、市原市東間部多遺跡では約120基検出されている。（西田1974）

これらの炉穴の出現は、従来より条痕文系文化の特徴と言われて来ており、県内でも、最も古く位置付けられるのは、船橋市佐倉道南遺跡で検出された子母口期の4基の炉穴である。（新津1975） そして、条痕文系では顕著に認められながら花積下層期には消滅するのである。炉穴の機能については従来から多くの説が提唱されているが、船橋市飛の台貝塚を調査した杉原氏は「煮沸用の炉」とした。（杉原1932） 又、その他にも、焼石による調理場としたもの（久保、坂詰1965）などがあり、概して調理場としているのが通説である。しかし、まだ確証の持たれていないのが現実であり、筆者も幾つかの疑問を持っている。1つは煙道を持つ炉穴の存在である。煙道を持つ例は、佐倉市上座遺跡（麻生1959）、東京都町田市田中谷戸遺跡（今井、加藤1976）などに知られるところであり、この煙道の機能を外に煙を出す為と考えるのが妥当であり、又、炉穴内にピットを持つ例も船橋市佐倉道南遺跡（新津他1975）などに認められ、上屋の存在が推測される。又、遺跡全面を調査してはいない事も考えられるが、炉穴の数に対して竪穴住居址の数があまりにも少ない事が伺える。例えば、市原市東間部多遺跡では住居址1基に対して炉穴約120基、佐倉市上座遺跡（麻生1959）では住居址2基に対して炉穴7基であり、炉穴のみという例も多く、この性格を単に調理場としてしまう事には問題があろう。これらから、筆者も確証ある訳では無く、一つの問題提起の段階として止めておきたいが、通常の竪穴式住居址とは性格的に異った「居住施設」として考える視点を持つ事の必要を感じる。

第3表　国分谷周辺の縄文時代遺跡

（○印 ― 土器片が確認されている
●印 ― 住居址などの遺構が確認されている）

	遺跡名＼出土土器	井草	夏島	稲荷台	花輪台Ⅰ	花輪台Ⅱ	三戸	田戸下層	田戸上層	子母口	野島	鵜ヶ島台	茅山下層	茅山上層	花積下層	関山	黒浜	諸磯a	諸磯b	浮島	興津	阿玉台	中峠	加曽利EⅠ	加曽利EⅡ	加曽利EⅢ	堀之内Ⅰ	堀之内Ⅱ	加曽利BⅠ	加曽利BⅡ	加曽利BⅢ	曽谷	安行Ⅰ	安行Ⅱ	安行Ⅲa	姥山Ⅱ	安行Ⅲc	杉田Ⅱ
1	幸田							○		○			●	○	●	●	○			○		○		○	○	○	○	○					○	○				
2	道六神							○											○		○				○												
3	木戸口（中金）																○	○	○																		
4	中金杉台																										○	○									
5	殿平賀																										●	○	○								
6	馬屋敷												○	○																							
7	大谷口（大谷口Ⅲ）												○	○			○	○						○	○	○											
8	外番場（大谷口Ⅱ）（大谷口）												○	○												○											
9	達摩（大谷口）（大谷口Ⅰ）												○	○								○		○	○	○											
10	中郷																○																				
11	西															○	○	○	○	○		○						○	○								
12	東平賀																○					●	●	●	●												
13	根木内																					○	○	○	○												
14	辻																												○	○	○						
15	宮の後																								○	○											
16	殿内																○											○	○								
17	境外																○											○	○	○	○						
18	観音下																											○		○	○						
19	二ツ木溜台																○																				
20	後田																							○	○	○	○	○	○	○			○	○				
21	二ツ木向台	○		○	○	○		○					○	○	○	○	○		○									○	○		○						
22	勢至前			○									○	○		○																					
23	北道合												○	○		○	○	○		○								○									
24	南道合							○								○	○		○																		
25	新井																									○	○	○	○	○	○						
26	八ヶ崎																○			○		○		○	○	○	○	○	○								
27	中堀込																○	○		○	○	○			○		○										
28	入																○																				
29	八ヶ崎貝の花																							○	○	○											
30	貝の花																○	○		○		○		○	●		●	●	●	●	○	○	○	○	○		○
31	根切																								○												
32	谷ッ口Ⅰ																								○	○	○	○									
33	谷ッ口Ⅱ			○																																	
34	栗ヶ沢若芝																○										●	○	○	○	○						
35	笹塚																					○			○												
36	上本郷																●		○	○		○	○	●	○		○	○	○	○	○		○	○			
37	上本郷七畝割	○		○									○	○		○	○	○		○				○	○	○	○	○							○		
38	寒風台															○	○					○			○												
39	中和倉寒風																											○									
40	千駄堀寒風																○						●	●	○	○	○		○	○	○						
41	大六天															○	○							○	○	○											
42	北郷																			○		○			○												
43	南屋敷																			○					○												
44	清水台																	○	○																		

	遺跡名＼出土土器	井草	夏島	稲荷台	花輪台I	花輪台II	三戸	田戸下層	田戸上層	子母口	野島	鵜ヶ島台	茅山下層	茅山上層	花積下層	関山	黒浜	諸磯a	諸磯b	浮島	興津	阿玉台	中峠	加曽利EI	加曽利EII	加曽利EIII	堀之内I	堀之内II	加曽利BI	加曽利BII	加曽利BIII	曽谷	安行I	安行II	安行IIIa	姥山II	安行IIIc	杉田II
45	四ッ窪台																	○																				
46	出来山																	○	○	○	○																	
47	登戸	○											○	○		○	○				○				○													
48	小塚前																							○	○	○												
49	陣屋前II																					○		○														
50	陣屋前I																					○																
51	子和清水																					●	●	●	●	●												
52	新山																					○		○	○													
53	初富飛地I												○	○						○		○				○												
54	初富飛地II																					○		○														
55	五香六実元山I																					○				○												
56	鳥井戸				○	○			○				○	○		○	○		○	○	○	○							○	○	○							
57	松戸七畝割I																										○	○										
58	柿ノ木台																										○	○										
59	陣ヶ前																								○	●	○	○					○	○				
60	和名ヶ谷溜台																							○	○	○	○											
61	下水																						○		○		○	○	○	○		○	○	○				
62	通源寺																○					○		○	○		○		○	○	○							
63	諏訪原																		○	○	○	○		○			○	○										
64	生松														○	○	○		○								○											
65	矢深作																○	○	○	○		○							○	○	○							
66	北山																								○		○											
67	初崎												○	○		○	○	○	○		○	○		○	○		○											
68	河原塚												○	○												○	●	○	○									
69	金楠台																								○	●	●		○	○	○							
70	坂之台												○	○											○		○		○	○	○							
71	新橋台I																					○					○		○	○	○							
72	新橋台II																							○														
73	関台																					○		○	○	○	○	○	○	○	○							
74	串崎新田古和清水																					○		○	○													
75	下ノ宮												○	○		○	○			○	○	○		○	○													
76	島崎																○	○	○	○		○		○	○		○											
77	雨砂																○			○		○																
78	大久保																○			○		○		○									○					
79	権現山																○							○														
80	新田前																○			○		○		○	○													
81	妙見前																					○																
82	木戸場																○					○		○	○	○												
83	中内																							○	○													
84	根之神台																					○		○	○	○												
85	中峠																					○	●	●	○													
86	受原																					○		○	○	○												
87	内野																								○	○	○	○										
88	紙敷																					○		●	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	
89	名木																							○	○													
90	新堀込																							○	○													
91	栗芝台												○	○			○					○		○	○	○	○	○										
92	新橋																					○		○														
93	秋山向山																					○		○	○	○	○											
94	前原I																								○													
95	前原II																							○														
96	牧之内												○	○			○		○	○		○		○	○		○	○										

	遺跡名＼出土土器	井草	夏島	稲荷台	花輪台Ⅰ	花輪台Ⅱ	三戸	田戸下層	田戸上層	子母口	野島	鶏ヶ島台	茅山下層	茅山上層	花積下層	関山	黒浜	諸磯a	諸磯b	浮島	興津	阿玉台	中峠	加曽利EⅠ	加曽利EⅡ	加曽利EⅢ	堀之内Ⅰ	堀之内Ⅱ	加曽利BⅠ	加曽利BⅡ	加曽利BⅢ	曽谷	安行Ⅰ	安行Ⅱ	安行Ⅲa	姥山Ⅱ	安行Ⅲc	杉田Ⅱ
97	堀込																							○	○	○												
98	小浜屋敷																								○													
99	芝居向																										○	○										
100	木戸前																								○		○	○										
101	大塚越																										●											
102	内山																					○		○	○	●												
103	白幡																				○			○	○	○	○											
104	馬乗場																					○		○	○	○												
105	台畑																							○	○	○	○											
106	南台																										○	○										
107	南台畑																										○	○										
108	大橋向山																								○	○	○	○	○	○	○							
109	彦八山																										○	○										
110	権現原																								○	○	●	○	○	○			○	○				
111	堀之内																									○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
112	真木ノ内																											○	○	○	○							
113	田東練兵場																●	○	○	○	○																	
114	国分平川																										○											
115	久保上																○	○	○																			
116	根郷留見															○	○	○		○				○														
117	諸																●	○	●																			
118	イゴ塚																○										○											
119	曽谷													○		○	●	●							○	●	●	●	●	●	●	○	○	○				
120	馬坂																										○											
121	安国寺																							○	○	○												
122	向台														●		●					●	●	●	●	○												
123	三中校庭												○	○	○	○		○	○	○							○											
124	高徳保															○	○																					
125	下貝塚															○	○			○							○											
126	庚塚															○	●																					
127	一の矢																										○											
128	下台															○											○	○	○									
129	鳴神山(A)												○	○								○	○	○	○	○	○	○		○								
130	鳴神山(B)																					○	○	○	○		○	○	○	○	○							
131	株木東															○	○					○	○	○			○	○										
132	株木															○	○	○		○							○											
133	姥山																					●	●	●	●	○	○	●	●	○	○							
134	今島田																					●	●	●	●													
135	貝柄塚																									○							○	○				
136	美濃輪台(A)											○	○	○																								
137	美濃輪台(B)							○					○	○						○				○			○											
138	根古谷			○	○								○	○																			○	○				
139	イザナギ神社境内																										○	○										
140	曽谷貝殻塚																																					
141	彌平田																																					
142	加茂神社																																					
143	宮久保												○	○	○																							
144	宮久保所願寺																																					
145	奉免安楽寺																																					
146	奉免南																																					
147	殻台																●	●	○	○																		

※ この表は、明治大学考古学研究部「MICLOLITH」第22、23号（1968、1969）。松戸市教育委員会「松戸の遺跡」（1976）をもとに作成したものである。

この時期に於いて、自然環境の変化の進行、即ち、気候の温暖化、海進の進行は、これまでと異った遺跡の分布を占している事は国分谷に於いても伺う事ができる。（第１図） 未だ、やや希薄ではあるが、それでも、かなり規則的な間隔（距離的ではなく環境的に）を持って数遺跡を単位とする群を形成し、分布している。即ち、1、6、7、8、9の群、21、22、23の群、53、56の群、67、68、70、75、91の群、119、123、138の群、136、137の群である。こういった現象は環境の良化に伴う食料資源の増加と、生産技術などと相まった、より効果的な生産方法の追求の模索として表出したのであろう。これらの分布は、広義の茅山期を一括しているため細分した場合の分布は明確ではなく、又、すべてが集落遺跡であるのかは確認されていないが、少くとも、各集落が、それぞれの生産領域を保有しあっていた事が現象したのであろう。即ち、条痕文系土器の使用されたこの時期は、住居址や炉穴などの日常生活に必要な施設の整備、遺跡の規則的立地は、生産環境の良化を前提に、季節的な環境の変化に左右されずに同一地点を本拠として生産活動を行なう事、即ち、定住の萌芽から形成の過程として捉える事ができるだろう。

前期

5） 花積下層、関山期の集落

茅山期に於いて確立された集落の定住化は、松戸市幸田貝塚、同二ツ木向台貝塚として完成される。

この時期に属する遺跡数は、広義の茅山期よりやや多く、29ヶ所確認できる。しかし、現在までに集落の存在を明らかにされ得たのは、上記の２遺跡と少ない。しかし、茅山期とは比較できない程の住居形態、数、そして貝層を持ち、早期とは決定的な生活様式の断絶がある事を示している。

幸田貝塚は、松戸市最北端部に位置し、ほぼ西に突出した舌状台地上に立地している点列状の貝塚である。これまで、５次に及ぶ調査が行なわれ、遺跡の一部が明らかにされ、その結果、花積下層期の竪穴住居址10基、関山式期の竪穴住居址75基が検出されている。（八幡、関根ほか1971、1972、1973、1974、1975） 又、貝の散布している状態からは、点列状貝塚ではあるが、その貝の量、規模は、馬蹄形のそれに匹敵するものである。出土する遺物の量も又、非常に多く、重複する住居も多く、この時期には、既に集落の定住化が完成していた事を示すに足りる充分な資料と言えるであろうし、前期初頭の縄文時代を明らかにする上で大きな意味を持つ遺跡であると言えよう。更に、この遺跡からは、前期には極めて稀な人骨が１体横臥伸展葬の状態で、住居址の床面に埋葬されていた。いずれにしろ、本報告書の刊行が期待される。

6） 黒浜、諸磯、浮島期の集落

国分谷周辺では、前の関山期で集落の存在が不明であった区域もあったが、この時期では、

○ 花積下層式、関山式土器を出土する遺跡
★ 黒浜式土器を出土する遺跡
△ 諸磯式土器を出土する遺跡
□ 浮島式土器を出土する遺跡

第２図　前期遺跡分布図

かなりの遺跡で集落の存在が確認されている。黒浜式土器を出土する遺跡39ヶ所、諸磯式土器を出土する遺跡24ヶ所、浮島式土器を出土する遺跡14ヶ所が数えられる。このうち、調査された遺跡の1例を紹介しておく。区域は、国分谷とは隣接した海老川流域に位置する船橋市飯山満東遺跡である。

飯山満東遺跡は、昭和49年に調査され、その成果は、昭和50年に報告されている。（野村、清藤ほか1975）調査の結果、黒浜期25基、諸磯a期2基、浮島期2基の竪穴住居址などが検出されている。集落が営なまれた頃には、かなり近くまで海水が入り込んでいたと思われるが、確認された貝層は小規模なもの5ヶ所であった。黒浜期、諸磯a期の住居址は、しばしば確認されるが、浮島期のものは、市川市東練兵場貝塚(北台貝塚)（西村1959、杉原、戸沢1971）茨城県取手市向山貝塚(西村1967)　印旛郡印西町高根北遺跡(中山1974)　などが掲げられるに過ぎない。

この他、台地の南西縁辺に検出された200余基のピット群からは鉢形土器などの、日常的に使用されない遺物が多数出土している。

国分谷周辺においても、又、飯山満東遺跡においても、中、後期と比べて、形成される貝層は、極めて少ない。しかし、確実に複数の土器型式にわたった集落が引きつがれており、又、国分谷周辺において調査されただけでも規則的な分布を示し、明らかに定住の安定が伺われるだろう。又、日常汁器以外の土器の生産が行なわれる事も、その生活が安定した事を示す一指標であろう。そういった事から、縄文時代前期一般を述べるなら、集落の定住が完成し、安定した時期と言える。

7)　中期・後期の集落

千葉県を含めた東京湾岸は全国的にも特に、貝塚の分布が著しく、又、大形化した貝塚も認められる地域である。又、縄文時代中期は、海浜地帯に限らず、集落の規模などに象徴されるようにその経済基盤そのものが前期までの実績の中から確固たるものとして築かれた時期であろう。それは国分谷周辺に限って言えば阿玉台式土器を出土する遺跡61遺跡、加曽利E式土器を出土する遺跡は84遺跡と、飛躍的増加を示す事は、全てが同時に存在した遺跡ではなく、又、集落以外の遺跡も当然存在する事から単純には言えないが、安定化した生産活動の当然の数字と言えるであろう。そのような意味でこの数字の大きさは単なる増加ではなく、過去の人間達の必然的結果であると同時に、未来的には、人間の歴史の或る転換期に至るまで、あるいは自然環境の大きな変動に遭遇するまで、一層の変換を行って行く事を秘めている。そして、この要素と遺跡の数単位への集中化、即ちかって相対的に分散していた集落間の結合の進行が揚げられる。この事は、前期、中期、後期の遺跡分布図（第2図、第3図、第4図）をみれば一目瞭然である。

第3図　中期遺跡分布図

第4図　後期遺跡分布図

(イ) 「国分谷」に於ける集落の展開

それでは、次に国分谷周辺では、具体的にどの様な単位で結合していたか、又、前期から後期にかけてどの様な変遷を行ったかたどって見たい。

これまで、単純な5期区分によらず、幾つかの土器型式を組み合わせながら論を展開してきた。この事は、決して便宜的にでは無く、それなりの事実を踏えた根拠を持っていたからである。まず、この基準を述べてみると、これまでの多くの発掘調査の成果をもとに、それらの遺跡が、どのような土器型式の幅を持っていたか共通点を探ってみた。

その結果基本的には次のような単位に区分する事ができると判断するに至った。それはⅠ)、(花積下層) 関山期、 Ⅱa)、黒浜、諸磯、浮島系期、Ⅱb)、浮島、興津期、Ⅲ)、阿玉台、中峠、加曽利EⅠ、同EⅡ期、Ⅳ)、加曽利EⅢ、堀之内期…である。これを県内の特に西部の国分谷周辺の遺跡に即して、特に調査された遺跡について述べてみると、まず、Ⅰ)とⅡ)の間については別稿で述べてあるが(清藤 1976) 、Ⅰ)の遺跡としては松戸市幸田貝塚、同二ッ木向台貝塚などであるが、この時期の集落は県内でも比較的少ない。Ⅱa)の集落はその数を急激に増加するが、船橋市八栄北遺跡(八幡、新津 1974) 、法蓮寺山遺跡(斉木 1973) 、柏市鴻ノ巣遺跡(古内他1974) 、我孫子市紫崎遺跡(古宮 1976) 、市川市北台貝塚(西村 1959、杉原、戸沢 1971)、殿台遺跡(奥山 1970) 、などが上げられる。又、Ⅱb)の遺跡は非常に少く、多くの問題を含んでいると思われるが、その好例は船橋市古和田台遺跡である。Ⅲ)の遺跡としては、松戸市子和清水貝塚 (松戸市教育委員会 1976) 、千駄堀寒風貝塚(西野 1963) 、船橋市高根木戸貝塚(西野、岡崎 1971) 、海老ヶ作貝塚(岡崎 1972) 、市川市今島田遺跡(杉原 他1969) など、Ⅳ)は市川市曽谷貝塚(能野、堀越 1976) 、松戸市金楠台遺跡(沼沢 1974) 、陣ヶ前貝塚(岩崎 1963) などである。集落の移動という事態、そして、更にこのような同一時期における地域ぐるみでの集落の移動という現象が、どのような要因によって生じたのかを推測する事は非常に困難である。考えられる要因の一つとしては、縄文時代の生産様式から、集落と食料の獲得などの行われる生産領域とは、距離的にも非常に密接な関係にあったと思われ、この事は集落の移動即ち、生産領域の移動をも意味する。又、不断の生産効果向上に向けた集団間の関係の再編成も考えられるだろう。更にこの他にも自然環境の変化など、種々の要因によってこのような現象が生じた事も考えられるであろうし、今後の課題と言えるだろう。しかし、それぞれの転機に、それぞれ注目すべき事象が認められる。Ⅰ)とⅡ)の間には、大宮台地には関山式土器を出土する貝塚が顕著である一方、市川市、松戸市には明確に集落として把えられる遺跡は2ヶ所と極めて少く、しかも松戸市北部に片寄っているが、続くⅡ)の黒浜期には広く分布し、中、後期に於ける遺跡の展開の基礎として位置付けられるような古地が認められるようになるという差異が認められる。また、Ⅱ)とⅢ)の間では浮島系土器の介入、前期末葉文化の実体が不明確な現象として表われているし、Ⅲ)とⅣ)の間では、それまで下総台地に認めることが出来なかった住居址内の「埋甕」が設けられることが揚げられる。これらが有機的にどのような要因

第５図　国分谷周辺における集落の展開

として機能し得るかは明らかではないが、気付いた点として述べて置く。

以上述べたような、この地域に於ける集落の斉一的移動がどのようになされたのかを松戸市と市川市の遺跡に限って、推測したのが第5図である。先述したように、関山期から堀之内期への流れをⅠ期からⅣ期とし、この間、この区域の人間達が全く姿を消し、代って他の地域(文化的に)の人間が移入して来たという事は考えられない事や、大規模な移動は、集落間のそれまで安定していたテリトリーの関係を破壊する事などから、極めて近い集落に移動したと考えられる事、更に、移動前の集落が生産領域として占有していたと思われる区域は、既成事実として、その集団に属するとはいわないまでも、他の集落が占有したと考えずに、更に第2図、第3図、第4図を参照し、前、中、後のいづれかの時期にも共通して認められる単位を摘出し線引きを行なったのが波線である。従って、波線の区域を要約すると、一時期の生産領域では無く、Ⅰ期からⅣ期にかけてその集団とその一族が長期間にわたって生産活動を行った領域を意味しているのである。その結果として、A～Ⅰの9つの群にこの区域を分ける事が出来た。第Ⅰ期に関しては、A群、幸田貝塚、B群、二ッ木向台貝塚の2群でしか現在のところ確認出来

第4表　国分谷に於ける集落の移動（前期から後期前半）

	Ⅰ　期	Ⅱ　期	Ⅲ　期	Ⅳ　期
A群	幸　田（1）	木戸口（4） 西　（11）	東平賀（12）	殿平賀（5）
B群	二ッ木向台（21）	北道合（23）	根木内（13）	二ッ木向台（21） 後　田（20）
C群		上本郷（36） 出来山（46）	上本郷（36） 千駄塚寒風（40）	上本郷（36） 栗ヶ沢（34） 貝の花（30）
D群		北台(東練兵場)(113) 根郷留見(116) 諸　（117）	通源寺（62） 和名ヶ谷溜台(60) 内　山(102)	陣ヶ前（59） 大塚越(101) 権現原(110) 堀之内(111)
E群		鳥井戸（56） 矢深作（65）	子和清水（51）	河原塚（68） 金楠台（69）
F群		牧の内（96）	中　峠（87） 上　敷（88） 牧の内（96）	中　峠（87） 上　敷（88）
G群		下　（125） 向　台(122) 曽　谷(119)	向　台(122)	曽　谷(119)
H群		殿　台(147)	鳴神山A(129) 鳴神山B(130)	下　台(128)
Ⅰ群		株　木(132)	姥　山(133) 今島田(134)	姥　山(133)

ない。以下、各群毎に、それぞれの中心的集落を掲げその群内に於ける集落の移動を推測したのが第4表である。この群別の作業は時間的に連続するという絶対条件の下で行ったので、Ⅰ期からⅣ期までの間に、場合によっては、例えば、C群Ⅲ期のように中心的な役割を果すと思われる集落が2ヶ所に存在する現象も生じるが、集落は、決っしてある枠にはまった姿を常に表わしている訳ではなく、その時、その状況によって結合、分離して行く事は充分考え得る事である。また、各群毎に、生産領域の面積が著しく異なっている事や、各群毎に形成された貝

塚の規模や時期が異なっている事も伺われる。例えばE群では、II、III、IV期の鳥井戸、子和清水、そして河原塚と金楠台に見られるように全て点列貝塚である一方、G群では、向台、曽谷と大規模な貝塚が形成された集落である。これらの差が何を意味しているのか、例えば各群、各集落間に於ける生産活動が、一定程度の社会的分業的にでも行なわれていたのか、今後の課題であろう。

(ロ) 環状集落(貝塚)の形成と意義

次に、中期に於ける或る特定型式の遺跡間の関係について触れておきたい。遺跡が集落のみならず、生産領域など、人間の行為の様々な痕跡を表わす事は事実である。それは、場合によっては生産領域であったかも知れないが、先にも触れたように、「遺跡間、支群間に相補の関係が成り立つ…」「群内で中心的な遺跡は1ヶ所のみ」という関係、(関根1973) 効果的な生産の志向から集団間の結合化が計られ、それは時として、小支谷を狭んだり、隣接して2集落が位置する場合がある。例えば、栗ヶ沢若芝貝塚と、貝の花貝塚の関係、船橋市高根木戸貝塚と高根北貝塚の関係などである。

それでは次に、この様な状況の中に、各集落が発掘調査によりどの様な姿を表わしたか、松戸市子和清水貝塚、船橋市高根木戸貝塚の例を使用する中から論を進めて行きたい。

まず、この2ヶ所の遺跡に関して、調査の結果の概略を述べてから論を進めて行きたい。子和清水貝塚は、下総台地の特に東葛台地を東西に分断しながら南に開折している国分谷の最奥の小支谷に面した一画の左岸、標高約30mのほぼ南に突出した舌状台地上に位置している。調査は一時的中断を何度か行ないながらも、昭和46年から昭和49年までの4年間にわたって行なわれた。その結果、住居址278基、小竪穴1000余基、埋葬人骨3体などを検出した他、多量の土器、石器などの遺物が出土している。(岩崎、関根 他、1972、1973、1974、1975、松戸市教育委員会1976) これらの遺構、遺物は、ごく一部の有茎尖頭器などの遺物を除くと、殆ど阿玉台式、中峠式、加曽利E I式、加曽利E II式の時期に属するものである。遺跡の南東部の1部が土取りにより破壊されて居り、また、墓地、道路などにより調査不可能な部分もあったが、縄文時代中期の環状集落そのものの様相を呈して居り、居住域内側に密集している小竪穴群とともに、中期集落理解の上には良好な資料といえるであろう。

なお、本遺跡に関する住居址の時期別分類は、未だ整理中であるため、主として概報(子和清水貝塚発掘調査団、1972、1973、1974、1975)を参照した。そのため、多くの点で修正される事は確かである。その事は、概に阿玉台期、中峠期、加曽利E I期の住居数が未掘部分を考慮してもやや不自然な点に伺われる。特に中峠期を中心とした分類は、本報告を待ちたい。

高根木戸貝塚は船橋駅付近で開析する海老川が流れる樹枝状の支谷の最奥部に位置し、南面する舌状台地上に立地している。この集落も、子和清水貝塚と全く同じ時期、即ち阿玉台期から加曽利E II期に至るまでに営なまれたもので、阿玉台期5基、中峠期8基、加曽利E I期16基、加曽利E II期31基、不明15基の計75基の竪穴住居址が検出されている。(西野、岡崎1971)

又、比較的良好な貝層の遺存を示しており、人骨８体も検出されている。この遺跡も環状を呈する集落ではあったが、遺跡の北東部及び北西部がやはり削りとられていた。又、報告者と筆者との間に土器型式の認定基準が異っているため、筆者が修正したものもあり報告書とはかなり異っているはずである。

次に、これらの成果を踏え、幾つかの頃目について検討してみたい。

先にも少々触れたが後藤氏は、「大形貝塚の消長が、縄文集落自体の盛衰と共にある事はそこにこそ、貝塚の文化的意義や集落の存在基盤、すなわち、生産的背景を解く重要な鍵が潜在する事を暗示している。とくに、大型貝塚が発達し隆盛をきわめる縄文中期から後期にかけて、集落自体がにわかに定着的かつ集中的になる…。」（後藤1973）と述べ、定着的になるには「貯蔵用土器」「貯蔵穴」が講じられ、その貯蔵対象は干貝であり、その結果大型貝塚、大型集落が形成されるとしている。又、点列貝塚と区別し、点列貝塚は「日々その日の食糧として消費されたものであり、この貝塚は、小数家族の日々の食べかすを棄てたいわゆる「ごみ捨て場」そのものであった」（後藤 1973）としている。後藤氏のこれらの文章で、理解しにくい点もいくつかあるが小さい点は除き、この論理でゆくと、大型集落は、干貝加工の行わなかった点列貝塚では存在し得なくなる。しかし、後藤氏のその大型の規模がどの程度までのものか不明であるが、子和清水貝塚の例は氏の考えの矛盾を明らかにした証左であろう。又、これまで触れて来た通り、定住性は条痕文系土器の使用された広義の茅山期に認められる事であり、又、次章で述べるように小竪穴は墓拡であり、幾つかの点で氏の論の中には矛盾が認められる。

次に、馬蹄形貝塚が形成されるその基本的要因である集落の構成について述べてみる前期から通して、廃屋にまず貝が廃棄される事は周知の通りである。それが、何故馬蹄形という形状になったのかは、大量の貝が採取された事を前提に、住居址が環状の動きを呈したという事に起因する。それでは、その「環状への動き」は何に規定され、どのような単位で行なわれたのだろうか。それを子和清水貝塚と高根木戸貝塚で探ってみたい。これらの点列状貝塚での検討は直接的には馬蹄形貝塚の論証にはならないが、基本的集落構成及び展開に共通している事は充分予測される事であり、それらの差は、生産活動の対象が地理的要因などにより、より海に対して行なわれていたのか否かによるのであり、集落の基本的形態については大きな差はない。もしあるとするならば、それは第５図で示したように、１つの領域を共有した集団間の関係の差としては表われる可能性があるが、貝塚の規模の大小に起因するものではない。子和清水貝塚と高根木戸貝塚を比較すると、ともに、環状を呈した集落ではあるが、双法とも、集落を営んだ当初、即ち阿玉台期から環状が意識されたのではなく、むしろ、集落を形成して行く過程で、台地中心部に意識された空間、それは後述する墓域としての小竪穴群を中心として、移住を重ねていった結果、環状集落として成立するのであろう。そして双方が環状集落という形態を持つ点では共通していても、その基本的構成が異っている事を見る事ができる。それは、子和清水貝塚は２つ以上の単位集団により形成された集落であり、一方の高根木戸貝塚は単一の

第６図　子和清水貝塚（時期は主として概報による）

集団により形成されたものであるという点である。この事は、前者が面的な居住域を形成しているのに対し、後者は、線的な居住域を形成する点に表われる。子和清水貝塚について、その環状集落の形成過程を述べてみる。この集落が営なまれ初めた当初、阿玉台式期には中央の区域を狭み、東西に住みわかれて位置している。一応東の集団をA集団、西のものをB集団とする。そして中峠期では、A集団はほぼ阿玉台期の居住域を踏襲した地点に住居を建て替えてい

第7図　高根木戸貝塚

本図は報告書の原図を、時期などについては
清藤が再検討したものである。

るが、B集団は、発掘結果に於いては、北の2基(B_2)と西南の2基(B_2)とに分散している。これを、住居を背景とした「小竪穴墓」について見ると、A集団に関しては居住域に接して、土器を副葬した「小竪穴墓」に顕著なように墓域が設定されているが、B集団については、B_2'にやはり土器が副葬された「小竪穴墓」の存在が確認されてはいるがB_2には少なくとも土器を副葬した小竪穴墓は検出されてはいない。続く加曽利E I期では、それぞれの集団が2分されるかも知れないがA集団、B集団とも、大きく、時計とは逆まわりの方向へ移り住んだ事が考えられる。(A_3、B_3)それは、やはり、「小竪穴墓」に副葬された土器(一部は棺とも思われる)の分布と、住居の分布から推測すると導びかれる。この動く方向は加曽利E II期まで継続し(A_4、A_4' B_4、B_4')阿玉台期からほぼ90°程動した時点でこの子和清水貝塚は消滅しているのである。この加曽利E II期には、別図で顕著なように、傾向としてはE I期にも認められるが、それぞれA_4とA_4'、B_4とB_4'とに細分できる。この事が新たな集団が介入したのか、又、時間差なのか、性格差なのか不明であるが、次に述べる大形土器の分布から一つと規定した。E I期から出現したと思われる比較的大形の土器を使用した「幼児埋葬墓」の分布を見ると、これまでの正円形から、長円形に近い分布を示している。

この様にして子和清水貝塚が環状集落として成立していった訳であるが、この集落と同時期であり、又、同様な形態を持つ集落としては、群馬県三原田遺跡(群馬県企業局、1976)が揚げられる。

一方、単一集団により環状集落が形成された高根木戸貝塚は、その環状を形成する事を規定した小竪穴が充分明らかにされてはいないが、子和清水貝塚の様に他の集団を特別に意識する事なく墓域と、そして、地形の双方に規制されて、環状を顕著にしたのであろう。

中期における一般的集落は、高根木戸貝塚に認められるように、墓域という空間に規制されながらほぼ同心円的に住居を建てかえるという最も基本的法則を持つ。

一方に於いては、子和清水貝塚のように二単位以上の集団により構成される集落もあるが、その動きもやはり意識された墓域に規制され、集落総体は結果として環状を呈するような動きをなすのである。

子和清水貝塚のような二単位以上の集団の結合は、生産効率の追求という歴史過程の中に要求されたものであり、その在り方は、子和清水貝塚のように、二単位以上の集団の同一集落内での結合として表れたり、栗ヶ沢若芝貝塚(藤井、前田、1966)と貝の花貝塚(八幡、岩崎、関根1973)との関係即ち、それぞれの集落形態は高根木戸形であるが、双方の共存は子和清水形的関係を示しているという形で表われるのである。更に、加曽利貝塚は、その様な在り方、即さ子和清水形域いは高根木戸形の集落が複雑に結合し合った結果貝塚外にも隣接した地点に集落が営なまれたのであろう。一つの集落に隣接して他の集落が存在する事は、中期から後期に至る段階では、中峠遺跡と上敷遺跡などのように「大集落」同志の関係、或いは高根木戸と高根北遺跡などの関係などに認められる通り、かなり一般的傾向として表れて居り、この時期は

単一集落として合ったというよりもむしろ、特に生産活動に於いて、集落ごとの関係が密に関係し合い、集落群としての在り方を強く示していると言えるだろう。問題は、子和清水貝塚のように同一集落内に二単位以上の集団が関係し合う一方、栗ヶ沢若芝貝塚と貝の花貝塚のように集落としては別に存在しながらも、生産活動に於ては密接な関係を持っているという点では子和清水貝塚と同質的であるなどの多様な存在形態をなす各集団間の関係の分析であろう。

以上中期と後期に、その時間的差による成熟度の差こそあれ、その存在形能としては共通している集落の基本的構成について述べて来た。使用した資料の不十分上、或いは、力量の限界から、視点程度の提出に止まるかも知れない。

(ハ) 集落に於ける墓域と小竪穴

次に、子和清水貝塚にも顕著であり、中、後期の集落内に特に認められる小竪穴について述べて行きたい。

かって、ある縄文時代中期の集落調査に参加した折、住居址内に人骨を検出した場面に遭遇した事がある。その時、住居址はどこでも多数確認されているにもかかわらず、そこに住んだ人間達が同様に確認されるということは極めて少なく、一体どこに埋葬されているのかという疑問を持った事がある。そして中期は廃屋墓が一般的であるという認識から、貝層を伴わない住居址でもその存在を予測し、住居址覆土の断面を注意した事があったが、何も掴めないという結果に終った。ここで、墓が集落の中で、特に空間的にどのような位置を占めていたかを述べて行きたい。

我々は、集落内に日常的に使用された住居屋外炉などの居住域などとともに、墓域の存在を予測し得る。それは特に中期に於いては、所謂「廃屋墓」と呼ばれる墓が多く認められる通り、埋没しつつある廃屋が現在に於ける「霊園」の様に、埋葬の為の空間として分離されてはいないにしろ、埋葬場所の一つとして意識されていたと考えられる。

次に、縄文時代特に中期に於いては、どの様な埋葬が行なわれていたのかを考えてみたい。

中期の埋葬形態としては、埋葬に心要な規模の穴を掘って葬むる土壙墓が一般的であり、こういった土壙墓が設けられる区域は廃屋である事が多い。又、埋葬された状態は伸展葬あるいは屈葬などと同一時期でも統一されてはおらず、この事が何に起因しているのかを検討する事は、「構成の主体者たる縄文時代人が、いかなる人間集団の形態や埋葬儀礼の方式をもっていたかを追求する事によって、当時の社会構造や思想的背景を解明することを目的」(後藤1968)とするためにも必要であろう。又、この他広義では同じ土壙墓の範疇に含まれるが、袋状あるいは筒形の断面をもった所謂、小竪穴を使用する事がある。その他、中期、特に阿玉台期～加曽利E期には、乳幼児(あるいは胎児にも)に対して、小竪穴中の甕棺墓が考えられるだろう。

小竪穴の埋葬について述べて見ると、従来からも小竪穴を墓壙として把える説もあった。即ち八幡一郎氏は、貯蔵施設か、あるいは墓穴として仮定している。

小竪穴の性格については、現在まで多くの考えが述べられてきた。それらは先に述べた墓壙

説、「粘土採掘のために穿たれた」(八幡1971) というもの、犬小屋説(山内 1942)、落し穴説(中川1938)、貯蔵穴説(池上1938、田代1968、杉原、戸沢1971、堀越1975) などであり、現在では貯蔵穴と把えるものが多いようである。

それでは、現在までに小竪穴から確認された人骨の類例を探して見ると、確かに「廃屋墓」と比較すると圧倒的に少ない事は、事実であろう。しかし、それらの「小竪穴埋葬」を見て行くと幾つかの興味ある共通点を見い出す事ができる。まず、「小竪穴埋葬」の例を掲げてみると、松戸市子和清水貝塚 (松戸市教育委員会 1976) 第276号小竪穴からは、性別は未だ整理中のため明らかではないが、成人が側臥屈葬の状態で確認されている。報告(高橋 1974) では、「下層落ち込み土中」とされているが、主観的観察ではあるが床面直上と言っても差しつかえない状態である。又、埋葬後に多少動く事は、遺物などでは推測されている事である。人骨は袋状小竪穴の北東隅に押しつけられた状態であり、従って足の一部は上端の影になっている。又、完形の加曽利ＥⅠ式の深鉢形土器が１点副葬されている。

船橋市高根木戸貝塚(西野、岡崎 1971) では、第90号小竪穴で二体確認されている。いずれも小竪穴底面に確認され、埋葬状態は第90号の一体が側臥屈葬である他は仰臥屈葬である。第90号小竪穴では中峠式の大形土器片が「かぶせたと思われる埋葬状態」(西野、岡崎 1971) で出土し、第91号小竪穴では加曽利ＥⅠ式土器の深鉢形土器が副葬されており、第93号小竪穴では中峠式土器が３個体副葬されている。３基の小竪穴は、いずれも袋状を呈している。

千葉市蕨立貝塚では、No.29、No.30竪穴遺構の２基に人骨が確認されている。この他、底部付近を欠き倒立した状態で出土した加曽利ＥⅠ式深鉢形土器の中に、幼児骨が確認されている。No.29竪穴遺構は、袋状のもので屈葬の状態で検出され、複数の個体の深鉢形土器が伴っている。又、No.30竪穴遺構では、袋状を呈し、ほぼ南側に設けられた竪穴内のピットの中に屈葬の状態で検出されている。いずれも加曽利ＥⅠ期である。(千葉市史編纂委員会 1976)

以上のことから、①いずれも袋状小竪穴である事、②蕨立貝塚No.30は明確ではないが、他のいずれも深鉢形土器が副葬されている事がわかる。

次に堀越氏が「墓壙説」を批判している点にそって述べて見たい。(堀越 1975)

まず、高根木戸貝塚報告書の「埋葬の状態から見て最初から埋葬のために小竪穴を構築したのではなく、むしろ再利用したのではないかと思われる」を参照しているが、報文中には、どういった「埋葬の状態」が埋葬を目的としていないのかという点に関して、全く資料 (土層断面図や人骨と底面のレベル関係など) や、そう述べた根拠には触れておらず、むしろ筆者が報告書の、特に写真などの骨の検出状況を見た限りでは、底面から出土している点、人骨が小竪穴の上端とどの様な位置関係にあるか明らかではないが、同時に埋納されたと思われる土器の出土を垂直に見た場合、上端の「影」の部分に入る事などから、墓壙という印象を強く持ったのである。又、子和清水貝塚の人骨は土器と伴に、明らかに「影」の部分に入り込んでおり、さらに、類例全てが底面あるいは床面直上であり、特に蕨立貝塚の小竪穴内のピットに埋葬され

ている事は、明らかに埋没して行く過程ではない事を強く物語っているであろう。又、堀越氏は、同じく蕨立貝塚No.29竪穴遺構出土人骨の例に関して、「ローム層中に掘り込んだ、そのピットの下部には半分ほどの黒色土が充満しており、その上に中期中葉の甕形土器3分の1個体分ほどの土器片を敷き、その上に遺体を……」（傍点筆者）（穴倉1974）の引用と子和清水貝塚出土人骨が底面よりやや浮いている状態から埋没過程に埋葬したと述べている。

しかし、子和清水貝塚の例は、確認面としては「下層落ち込み土中」に違いないが、実際には床面直上と表現しても差しつかえない位置である。又、蕨立貝塚の検出状況を見ると、これもレベルに関する資料はないが、写真で見る限り重複するNo.28竪穴遺構の底面とほぼ同レベルで人骨の上面を確認しているように観察できる。（千葉市史編纂委員会1976、2－49図C）人骨を覆っていた土器でも同レベルに観察できるから、あるいはNo.28底面よりやや低いかも知れない。（同2－49図b）人骨の上面ですら、このように観察すると出土状況は、床面に近いと言えるだろう。それは、No.28とNo.29の底面との比高は、約20～30cm程度であるからである。ちなみにNo.29のローム掘り込みは、約90cmであり（同2－44図）、報文の表現の曖昧さを物語っている。

次に「この時期の埋葬法として一般的ではない。」（堀越1975）と述べているが、果して「廃屋墓」が一般的なのであろうか疑問を感じざるを得ない。それは、子和清水貝塚では、約270基の竪穴住居址が検出されている一方、検出した人骨は僅か4体である。この子和清水貝塚に居住した人間の数を割出すのは非常に困難ではあり、次の様な仮説を立てる事自体無意味と思うが、仮に、姥山貝塚（八幡、小金井1932）、加曽利貝塚（穴倉、小片1968）などから一住居5人居住し、これも仮に一住居一世代として推定すると1,000人以上居住した事になり、余りにも検出した人骨が少ないと考えられる。仮説の上の仮説が無意味な点は承知しているが、要するに確認例がなく一般的と言われる「廃屋墓」も居住した人間の数と比較すると決して一般的ではない事を強調したいのである。子和清水貝塚が地点貝塚であり、検出した人骨数が少なくとも当然かも知れないが、人骨が検出されなかった貝層が全貝層中の殆どであった事も付け加えておきたい。さらに付け加えるなら、良好な貝層を持つ市川市向台貝塚では36基の住居址に対して14体、姥山貝塚では、昭和37年に行なわれた明治大学の調査のうち中期についてのみ言えば住居址11基に対して5体である。（杉原、戸沢1971）これらの事は、「廃屋墓」が一般的なのではなく、廃屋に貝が棄てられる事の結果であり、もし廃屋墓が一般的ならば「墓壙への埋葬は一気に穴を埋め戻す行為を伴うものであり、そこに不自然な推積が認められるはず」（堀越1975）であり、住居址覆土及びその内の貝層が自然的な推積を示す事は、殆んどないはずである。しかるに、その様な事態を予測させる土層断面図は、めったに見る事ができないのである。

一方、子和清水貝塚第276号小竪穴は、堀越氏の指摘する通り、上下の層が複雑に入り込んでおり、一時に埋め戻した事を物語るものであるが、こういった土層断面が小竪穴一般に認められる事である。

従って、未だ小竪穴からの類例は少はいが、それは貝を廃棄する慣習が一般的ではなかった結果によるものであり、一方、貝の廃棄が一般的であった廃屋から集落を構成した人間の数と考えさせるような十分な数の人骨が検出されていない事から、一般的な墓地の存在を推測させる事、類例は少ないが小竪穴の床面ないしは近くから人骨が確認されている事、覆土が一時に埋め戻された様相を呈している事などから、小竪穴が埋葬施設、墓壙であると十分考え得るであろう。

次に、小竪穴埋葬にも、時間的差異により、あるいは同時期でも性格的に異なる点がある事について、子和清水貝塚の例に側して述べて行きたい。

まず、小竪穴の形状は、概して阿玉台期及び中峠期、加曽利ＥⅠ期には袋状を呈しているが、ＥⅠ期からＥⅡ期には筒形が顕著になる。この傾向は、高根木戸貝塚にも認められ、一定の広がりを示すと思われる。

次に、小竪穴内から完形、あるいは底部、胴部などの一部を欠いた土器が出土する場合がある。これらのうち、加曽利ＥⅡ式の大形の深鉢形土器が出土する例は少なくない。（第 6 図）これらの土器は、完形で出土する場合も多く、又、2 次的焼成を受けていないものが多い。これらの土器に対して「貯蔵用土器」とする規定もなされていた。（後藤1973） しかし、船橋市海老ヶ作貝塚では、小竪穴内から、この種の土器が出土し、その中から小児骨が出土したという報告がなされた。（花島1975） 従って、加曽利ＥⅡ式土器における大形の深鉢形土器が出土する小竪穴は、副葬品としてではなく、それを乳幼児の棺として使用されたと推測されるだろう。

この所謂「甕棺墓」は、先に述べた蕨立貝塚で、加曽利ＥⅠ期にも認められている。この時期では、乳幼児を埋葬する目的で製作された大形土器は認められず、蕨立貝塚では、通常の土器の胴下半部を欠いたものを倒立させて置き、納めている。この為、副葬品か、幼児埋葬に使用したものであるのか、明確に区分できないが、別図では、A）加曽利ＥⅡ式の大形土器の出土したもの、B）加曽利ＥⅡ式のうちの他の土器が出土したもの、C）中峠式から加曽利ＥⅠ式の完形土器を出土したもの、D）同時期の胴下半部などを欠いたものの 4 種類に分類しておく。

それを見ると、特に加曽利ＥⅡ式の大形土器を使用した甕棺墓は、居住域の内側に、一定の幅を持って環状に区画されていた事を見ることができる。これらの居住域と墓域との関係は、環状とその内側という形態は、とらなくとも一定の規制における区画された共同墓地という関係は、埼玉県膳棚（埼玉大学考古学研究会 1970） や長野県尖石（宮坂 1957） など広く分布しており、例を見い出すのに苦労は必要としない。この、中期における「廃屋墓」に顕著な土壙墓と、小竪穴埋葬の同時存在が、被葬者の社会的役割を背景としてなされているのか明らかではないが、今後、集落そのものの実体を把握して行く上での課題と言えよう。

次に、こういった墓域の設定がいつに始まるか検討してみたい。

縄文時代早期では、神奈川県平坂貝塚に於いて、夏島式土器を伴う人骨が確認されている。

第 8 図　晩期遺跡分布図

（岡本 1953） この人骨は、「ローム面に横たえられていた。埋葬するために十分な穴が掘られたとは見られず、せいぜい土が薄くかけられたといった感じ…」との事である。埋葬例としては、この例が最も古いと思われ、続く時期では、屈葬例として最も古い長野県栃原洞穴の例などが掲げられるが、本県では、千葉市向の台貝塚の検出例が最も古いと思われる。（武田 1953） 向の台貝塚では、芽山期に属する住居址の検出されたが、２地点から、それぞれ２体づつ、計４体の屈葬埋葬人骨が確認された。そのうち１地点の２体は、住居内の所謂「廃屋墓」である。これらが、墓域に於ける埋葬なのか、資料も少なく、類例も少ないため深くは述べないが、墓域の設定は、定住実証の１つの基準にもなり得るだろうし、今後の資料の増加を待ちたい。

前期に入ると、この時期の埋葬人骨の実例は少ない。黒浜期に市川市北台貝塚で、貝層中より検出されている（西村 1959） が、他に例を見る事は難かしい。松戸市幸田貝塚では、関山期の竪穴住居址の床面より１体検出しており（松戸市教育委員会 1974）、「住居の廃棄直後に遺体が置かれ、これに伴い火の使用があった」との事であり、「埋葬遺体には、貝が被覆され、最上部に片口土器を直立した状態で埋置してあった。」との事である。幸田貝塚は、良好な、しかも大規模な貝層を有する花積下層期から関山期の大集落でありながら、これまで検出された人骨がこの１体であり、「廃屋」以外に墓域が存在したのであろう事は、十分予測できる。

人骨は検出されなかったが、黒浜期から浮島期にかけての興味あるピット群を検出した遺跡に船橋市の飯山満東遺跡がある。（野村、清藤 1975） 居住域の西南端で台地の縁辺の極一画に、径0.3～1.6ｍのピットが約200余基検出された。この中から、玉類や獣面把手の他に多数の鉢形土器が出土しており、又、数例、深鉢形土器の大形破片が外面を上に、向かを覆う状態で確認されている。これらのピットに人骨が伴ったという実証例がないため明言できないが、十分墓域として推測され得るものである。

8） 晩　　期

後期後半から晩期にかけた遺跡数の減少は国分谷にも顕著である。（第８図）本稿では論じないが、この遺跡数の減少は、海退の進行による生産環境の悪化とともに、完成しつくした中、後期の縄文社会の生産関係の当然の帰結として、新たな変換への胎動として理解する必要があるだろう。この事は、又、弥生時代における社会的諸関係の成立などとも兼ね合わせて考えて行かなければならないだろう。

おわりに

これまで、不充分な事は十分承知ながら、筆者の、現在に於ける縄文時代の集落に対する認識を明らかにして来た。このテーマ自体、非常に大きく、生涯のテーマとしても大き過ぎるかも知れない、したがって今後更に追求して行く姿勢だけは持ちたいと思う。

諸兄の御教示をお願いする次第である。

この稿を起すに当り多くの方々に御指導、御教示を賜った。特に、東京教育大学助教授岩崎卓也氏、松戸市文化ホール関根孝夫氏には資料や文献を実見させていただいたり又、御教示も賜った。末筆ながら感謝の意を表しておきたい。

最後に、この稿の完成を待たずに、急に逝去された中村恵治部長に原稿を提出する事が出来なくなった事が非常に残念である。ここに慎しんで哀悼の意を表する次第である。

参考文献

麻生　優　「佐倉市上座発見の住居址と炉穴」　駿台史学9号 1959

天野　努　「地国穴台遺跡」　千葉ニュータウン埋蔵文化財報告書II 1974

地上啓介　「栃木県那須郡狩野村槻沢石器時代住居址報告」　史前学雑誌7－6、8－1 1935

今井恵昭、加藤　修　「田中谷戸遺跡」　1976

岩崎卓也　「陣ヶ前貝塚」　松戸市文化財調査報告　第1集 1963

岩崎卓也、関根孝夫　「子和清水貝塚」 1972、

「子和清水貝塚　1973」 1973、

「子和清水貝塚　1974」 1974、

「子和清水貝塚　1975」 1975

江崎　武　「千葉市加曽利発見の有舌尖頭器」　金鈴9号 1966

岡本　勇　「相模、平坂貝塚」　駿台史学3号 1953

奥山睦義　「殿台遺跡」1970

久保常晴、坂詰秀一　「町田市山崎遺跡群・一次、二次調査概報」 1965

熊野正也、垣越正行　「曽谷貝塚調査概報」 1976

群馬県企業局　「三原田遺跡」 1976

後藤和民　「加曽利貝塚I」 1968、

「原始集落研究の方法論序説」 駿台史学 29号　1970、

「縄文時代における東京湾岸の貝塚文化について」 房総地方史の研究　1973

小林達雄　「No. 52 遺跡」 多摩ニュータウン遺跡調査報告II　1966、

「多摩ニュータウンの先住者」 月刊文化財　1973

古宮隆信　「柴崎遺跡調査報告書(第3・4次)」 1976

斉木　勝　「法蓮寺山遺跡」　小金線 1973
埼玉大学考古学研究会　「膳棚遺跡」 1970
佐藤武雄　「No.14遺跡」　三里塚 1971
宍倉昭一郎　「石器時代ー生活と文化」　千葉市史 1974
杉原荘介　「下総飛ノ台貝塚調査概報」　史前学雑誌４巻３、４号 1932
「今島田遺跡」 1969
杉原荘介、戸沢充則　「貝塚文化」　市川市史 1971
鈴木道之助　「榎峠遺跡」　千葉ニュータウン埋蔵文化財報告書II 1974
「瀬戸遠蓮遺跡」　千葉ニュータウン埋蔵文化財報告書II 1974
清藤一順　「飯山満東遺跡の成果と問題点」　考古学ジャーナル129　1976
関根孝夫　「集落」　貝の花貝塚 1973
高島多末次　「椎塚介墟篇」　人類学雑誌31－4･5　1916
高橋博文　土坑「子和清水貝塚 1974」 1974
武田宗久　「原始社会」　千葉市誌 1953
田代　寛　「鉢木遺跡の袋状土壙」 1968
千葉市史編纂委員会編　「史料編Ｉ」　千葉市史 1976
戸沢充則　「茨城県北相馬郡立木貝塚」　日本考古学年報15 1967
戸沢充則、堀越正行　「美濃輪台遺跡Ａ地点」 1974
鳥巣正樹　石器「子和清水貝塚 1973」 1973
中川直亮　「横浜市鶴見区荒立に於ける遺跡ー特に鐘状竪穴其他に就いてー」　史前学雑誌10－１
1938
中山吉秀　「高根北遺跡」　千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書II 1974
新津　健　「佐倉道南ー縄文時代早期集落址の発掘調査ー」 1975
西野　元　「松戸市千駿堀寒風遺跡」　史朝84・85号合併号 1963
「三里塚」 1971
西野　元、岡崎文喜　考察「高根木戸」 1971
西村正衛　「千葉県西ノ城貝塚」　石器時代II 1955
「千葉県市川市国分東練兵場貝塚」　学術研究10 1959
「茨城県取手向山貝塚ー東部関東における縄文前期後半文化の研究その２」 学術研究16
1967
西田道世　「東間部多遺跡」　東間部多古墳群 1974
沼沢　豊　「松戸市金楠台遺跡」 1974
禰津正志　「原始日本の経済と社会」　歴史学研究4－4～5　1935
野村幸希、清藤一順　「飯山満東遺跡」 1975

花嶋八十八　「海老ヶ作貝塚－第２次発掘調査概報」 1975
藤井　功、前田　潮　「松戸市栗ヶ沢遺跡調査報告」 1966
古内茂他　「鴻ノ巣遺跡」 1974
堀越正行　「原始共同体社会研究の基礎理論」 1971
「縄文時代の集落と共同組織」 駿台史学 31号　1972
「小竪穴考」 史館　5・6号　1975
堀越正行、長崎元広　「水野正好氏の縄文時代集落論批判」　ふれいく創刊号 1971
堀越正行、田川　良　「美濃論台Ｂ地点」 1975
松戸市教育委員会　「幸田貝塚の調査(４)昭和49年度発掘調査概要」 1974
「子和清水貝塚構図版編」 1976
水野正好　「縄文式文化期における集落構造と宗教構造」 日本考古学協会 第29回総会研究発表要旨 1976
「環状組石墓群の意味するもの」 信濃20－4　1968
「縄文時代集落複原への基礎的操作」 古代文化21－3、4　1969
「なぜ縄文時代集落論は必要なのか」 歴史教育18巻３号　1970
宮坂英弐　「尖石」 1957
三論恵子　石器「子和清水貝塚 1974」 1974
山内清男　「石器時代の犬小屋」 民族文化３の８　1942
八幡一郎　「高根木戸」 1971
八幡一郎、新津　健　「八栄北」 1974
八幡一郎、岩崎卓也、関根孝夫他　「貝の花貝塚」 1973
八幡一郎、関根孝夫他　「幸田貝塚第１次（昭和45年度）調査概報」 1971
「幸田貝塚第２次（昭和46年度）調査概報」 1972
「幸田貝塚第３次（昭和47年度）調査概報」 1973
「幸田貝塚第５次（昭和50年度）調査概報」 1975
湯浅喜代治他　「千葉県松戸市周辺の先縄文文化遺物について」　下総考古学３ 1968
吉田　格　「茨城県花輪台貝塚発掘概報」　日本考古学協会第７回総会研究発表要旨 1948
和島誠一　「原始聚落の構成」　日本歴史学講座 1948